

『百物語評判』と朱子学

——儒者の啓蒙から娯楽小説へ——

寺 敬 子

はじめに

『百物語評判』【貞享三（一六八六年）刊】は、寛文十二年に山岡元隣宅で行われた百物語の会を収録した怪異小説集であり、同時に怪異ひとつひとつに対する元隣の「評判」、つまりは科学的な解説が付されているという怪異弁断の書でもある。この「評判」に影響を与えた学問としては、すでに先行研究において儒学の存在が指摘されている。雲英末雄氏は、「こゝには、陰陽五行の儒教思想や、孔子が『論語』において述べた『怪・力・乱・神を語らず』という主張がはつきり示されている。正気の前には、すべて邪気は出現しないのである。元隣はこのようにして、つとめてそうした儒教精神の下に怪異を説明しようとした。」⁽¹⁾と、評判の儒教一般との関わりを指摘された。さらに太刀川清氏は「物の生成を陰陽二気の交錯によるとする元隣の理論の根拠は宗の程伊川の『理氣二元論』の立場に通じる。」⁽²⁾と、また前芝憲一氏は「元隣が怪異を『評判』するとき、その理論的根拠となったものは朱子の鬼神論である」と、両者とも朱子、程伊川といった宋朝の儒者の説、いわゆる宋学、性理学に元隣の評判が拠っていることを指

摘されている⁽³⁾。

『百物語評判』の序において元隣は「儒仏兼学の老人」と称されており、さらに本文中においても、朱子学の書からの引用を行い、また儒者にまつわるエピソードを多数披露するなど、儒学に対する造詣の深さを窺う事が出来る。作中には『朱子語類』『二程全書』『性理大全』といった、宋学のテキストの名も多く挙げられており、先行研究の指摘する通り、元隣が儒学、中でもとりわけ朱子学を評判の大きなバックグラウンドの一つとしていたことは確かであると思われる。『百物語評判』の骨子がその「評判」にある以上、論理の依拠したところを精査することは必要な手続きであるかと考える。本稿では、先行研究をなぞる形となるが、まずは第一に元隣の「評判」に用いられる論理と朱子学との関わりを確認しておきたい。

さらに、朱子学を用いた怪異弁断は『百物語評判』のみならず、同時代の怪異小説や随筆にも多々見出すことが出来る。しかしこれらの論と元隣の「評判」との比較検討は、未だなされていないままである。本稿では同時代の儒者による怪異弁断と『百物語評判』を比較し、ひいては本作の文学史における役割を考察してみたいと思う。

一、評判の論理と朱子学

朱子学の学説と『百物語評判』を引きあわせるにあたって、朱子学のテキストとしては、元隣が目を通していたと思われる『性理大全』を用いたい。『性理大全』は宋の道学者一二重家の説を採集した宋学の集大成であり、一六五三年には和刻本も出されている。元隣は『百物語評判』巻一第八「神鳴付雷斧雷墨の事」において、「雷」という怪異を分析するにあたって「詳らかに性理大全に宋朝の儒者の論を載せたり」と、その書名引用しており、さらにそこで引く論も『性理大全』のものとはほぼ一致している。以下がその該当箇所となる。

夫れ雷は陰陽相せまる声なり。蟄せる虫も是れより出で、根に帰る。草木も是れより萌へ出づるなれば、天地の間になくても叶ふべからず。さは云へど其はげしきは天の怒なり。此故に孔子も迅雷には必ず形を變じ給へり（ア）。是れゆめゆめおそれさせ給ふにあらず。天の怒りをつ、しみ給へるなり。はるかに轟く処を云はゞ、天地の陽氣夏は天にあり、時に陰雲雨をもよほさむとて、江湖の水氣をのせて、湿風にいざなはれて、彼の空にある陽氣をつ、めり。もとより陰陽は相剋するなれば、陽はうごいて陰を出さんとす（イ）。かくてぞ天地にひゞき、山谷をうごかせり。其落つるといふは、陰の氣陽にかつ時は其声しづかなり。陰陽ひとしき時はおつるにおよばず。陽の氣陰に勝つ時は、其あまる処あるひは中空にさがり、又は地にくだりてかならず積悪の家に落ちて、悪人を災ひせり。されども雷に心ありて、かくあるにはあらざるべけれど、其つもれる惡といかれる氣の感ずる所なりけらし（ウ）。……（中略）……又雷の槌雷の斧雷の墨などといふ物、其落ちたるあとに、まことにある物のよし。其重み長さ色あひ能毒まで書物に待るめれどはかりがたし。猶星おちて石となるたぐひにて（エ）、雷ごとにはあるべからず。（傍線は以下全て筆者）

ここで元隣が語るのは孔子もまた雷には敬意を表したという故事（ア）と、陰陽による雷の原理（イ）、また悪人と雷の氣とが感応しあうという見解（ウ）に、また雷が落ちた後に残る雷斧、雷墨が隕石のようなものだ（エ）、という、雷にまつわる学識である。これらはすべて、元隣の言う通り、『性理大全』に載る宋朝の儒者の論に見出す事が出来る。以下、『性理大全』卷二十七「雷電」の該当箇所である。

致堂胡氏曰……陰氣凝聚、陽在內而不得出、則奮擊而為雷霆（イ）。雖聖人復起不能易矣（ア）。……（中略）……曰世人所得雷斧者何者也。曰、此猶星隕而為石也（エ）。

程子曰電者陰陽相軋。雷者陰陽相擊也。問人有死於雷霆者無乃素積不善、常然於其心、忽然聞震、則懼而死乎（ウ）。曰非也。雷震之也然。則雷孰使之。曰夫為不善者惡氣也。赫然。而震者天地之怒氣也。相感而相遇故也。

一見して明らかかなように、先に見たア、イ、ウ、エの要素はみなこの『性理大全』の記事と一致しており、元隣が確かに同書を知識源としていたことがわかるのである。なお同じく性理学に関わる書物として、作中には『二程全書』『朱子語類』等の名も挙げられている。しかし元隣がこれらの書からの引用だとして語る事柄とその書名引用には、若干の食い違いが見られる⁽⁴⁾。この事実は同二書の利用を必ずしも否定するものではないが、より確実に元隣が目にしてきた書物という基準から、本稿では比較対象として『性理大全』を用いたいと思う。以下、元隣の評判と朱子学との論理の一致箇所を、くだくだしくはなるが列挙していきたい。

まずは巻四第八「西寺町墓の燃えし事」を取り上げる。墓場で見られる怪火を扱ったこの章段には、元隣の怪異認識を端的に表している以下のような部分がある。

されども鬼神幽冥の道理なれば、人悉く其理をわきまふるに及ばず。其珍しきに付きて、或はばけ物と名付け不思議と云へり。世界に不思議なし、世界皆不思議なり。

怪異とはこの世の道理からはみ出したものではなく、単に珍しい存在であるがために「化け物」「不思議」と呼ばれる。しかし人がその理をわきまえないのは怪異も尋常な自然現象についても同様のことであり、いわばこの世のすべてが不思議である、と元隣は言う。怪異をイコール「珍しき」ものと捉えるこの認識は、巻四第九「舟幽霊付丹波の姥が火、津の国の仁光坊の事」においても、「かやうの事つねに十人なみにある事には侍らねども、たま〜はある道理にして」と、繰り返される。さらに同じ表現は『小さかづき』においても、

せかいのうちにつれかふしぎいつれかふしぎならざるハなし。ふしんをたつればいつれもふしぎ也春はなさき秋は木の葉

のおつるも是ふしき也されどもよのつねの人くめづらしき事ハふしきとおもへる。ミナ氣のまよひ也といへるに

(卷五「日待ちの雑談」)

と見ることができる。元隣の怪異認識を特徴づけるこれらの思想は、おそらく『性理大全』卷二十八「鬼神」に見られる、

伊川言鬼神造化之迹此豈亦造化之迹乎。曰皆是若論正理則似樹上忽生出花葉此便是造化之迹。又如空中忽有雷霆風雨皆是也。但人所常見故不之怪。忽聞鬼嘯鬼火之屬則便以為怪。不知此亦造化之迹。

という一節を踏まえてのものであろう。伊川の言う「造化の迹」はこの世の森羅万象すべてを指すものと考えられるべきであろうか。伊川は、通常の自然現象も、また「鬼嘯鬼火」の類も、どちらもが「造化の迹」であるのに、ただ人は「所常見」であるという理由で前者を不審に思うことはないのだ、とする。ここでは怪異を自然現象と同一にみなすことで「自然の鬼神化」^⑤がなされているわけであるが、「世界みな不思議なり」という元隣の言葉もまた、怪異とその他一般の自然現象を同一のものとみなすことよって成り立っているとと言える。朱子学は怪異を否定するのではなく、怪異もまた森羅万象の一つであると認めることで自らの論理下においた。その考えをベースとした元隣の評判もまた、怪異の存在を否定しないわけである。

そうした考えの根本となるものが、鬼神もまた、万物と同じく陰陽二氣の働きによって現れたものだとする程伊川や朱熹の鬼神論であろう。『性理大全』においては、卷二十八「鬼神」に以下のように見ることができる。

鬼神只是陰陽二氣屈伸往來物言之。神是陽靈、鬼是陰之靈。靈云者只是自然屈伸往來。恁地活爾自一氣。言之則氣之方伸。而來者屬陽為神。氣已屈而往者屬陰為鬼。……（中略）……如草木生枝生葉時屬神、衰落時屬鬼。如潮之來屬神、潮之退屬鬼。……（後略）。

朱子学の論理において、すべての物は陰陽の二氣から成り立つが、鬼神もまた例にもれず、その正体は陰陽二氣の屈伸である。二氣のうち陽を神と、陰を鬼と為し、伸びる物、生じるものは神に、退くもの、衰えるものは鬼に属する。元隣はこの論理をそのまま評判の中で次のように撰取している。

凡そいきとし生ける物、何れも陰陽の二氣にもる、物なし。是れを両儀といふ。その陽の所為を神と云ひ、陰のなす所を鬼といふ。されば物毎のはじまると長ずるは神にて減ずると終るとは鬼なり。

二書を引き比べればわかる通り、『性理大全』からくだくだしい具体例を省き要約すれば元隣の評判になるわけである。元隣の評判が「鬼神論」に拠ることが、ここにも明らかに見られる。また幽霊の見える道理について、元隣は巻二第五「うぶめの事付幽霊の事」で、「氣」と言う言葉を用いて以下のように評判する。

たとへば人の氣おとろえ形つかれて病死する人は、火のおのづからきえて、其灰にもあた、かなる氣のなきがごとし。或はうらみ死にしぬるか、又は劍戟のうへにて死する者は、其氣も形もおとろえざるに俄にしするなれば、いまだもゆる火に水をかけてきやせる時は、其あた、かなる氣しばしのこるが如し。

怨み死にや、劍戟の上で死んだ者は、死んでもしばらくは「氣」が残るため、死後いくばくの時間かの間は幽霊とし

て姿が見えることがある、と元隣は言う。この評判もまた、『性理大全』巻二十八に見られる次のような説を背景としている。

問、伯有之事別是一理如何。曰、是別是一理。人之所以病而終盡。則其氣散矣。或遭刑、或忽然而死、死者氣猶聚而未散。然亦終於一散、銜冤憤者亦然、故其氣皆不散。伯有為厲之事、自是一理謂非生死之常理。人死則氣散理之常也。他却用物宏取精多族大而強死故其氣未散耳。

ここでは『左伝』に見られる伯有の幽霊を題材として、死者の「氣」と幽霊の関連が述べられているが、その主旨は元隣の語るものと同じである。刑死したもののや突然死亡したものの氣は、すぐに散ることなくしばらくその場にとどまり、幽霊となって姿を見せることがあるという。

さて、この論の前提としては、『性理大全』に「人之所以病而終盡。則其氣散矣」とある通り、人が死ねばその氣が散るのだという認識が存在するわけであるが、裏返して言えば、人は氣が集まることによつて生体を為している、ということになる。そして元隣の評判にもまた、「氣が集まれば物を生じる」という論理が頻出する。以下列挙すれば、巻一第三「鬼と云ふに様々の説のある事」に見られる「又鬼魅の類といふも、山谷のこぶかき幽陰の所の氣のつもりより起る物なり」に始まり、

・天地の間に生ずる物はみな氣よりおこれり、氣のとゞこほるによつて形を生ず。たとへば煙のすゝになるがごとし。煙にてみたる時は、かたちなく手にもとられずといへども、其つもりてすゝになりたる時は、手にとらるゝなり。是れ氣は質の始めまる所なり。(巻二第五「うぶめの事付幽霊の事」)

・されば垢ねぶりも、其塵垢の氣つもれる所より化生し出づる物なるが故に……（卷二第六「垢ねぶりの事」）
等、随所でこの論理が使用されている。さらに少し飛躍はあるものの、

- ・其氣のあつまる所にては鬼魅の精靈あるまじきにあらず。（卷三第六「山姥の事付一休物語并狂歌の事」）
- ・何にても其物あつまれば、其精かならず生ず（卷三第四「銭神の事付省陌の事」）

といった氣と精靈とを結び付ける評判も、大元は氣の集合によって形あるものが生じると言う右の論理に倣うものであるかと考えられる。このような氣の集合理散によつて物が生まれ、また滅するという論理は、古くは『莊子』に「人之生氣之聚也。聚則為生、散則為死。」（外篇知北遊第二十二）との表現が見られる。『宝蔵』跋文に「聞老莊之玄理」と見られる通り、元隣が『莊子』を学んでいたことは明らかであるから⁶⁾、この個所もその影響と見ることもできるが、しかし『莊子』が人の生死と氣の関わりを解くにとどまるのに対し、この説を受け継いだ朱子学はさらに「物生則氣聚。死則散。」（『性理大全』卷二十八）と、その対象を人以外の物質にまで広げている。氣が集まれば物を生じるといふ、『百物語評判』の大きな論理的支柱の一つは、こうした朱子学の学説に拠っていると考えてよいだろう。

二、「妖は徳に勝たざる道理」について

前章で挙げた論旨と並んで『百物語評判』に繰り返し説かれる論理に、「もとより妖は徳にかたざる道理なれば」（卷二第五「うぶめの事付幽霊の事」）をはじめとする、怪異の原因を受け手の内面的な資質に求める論旨がある。徳の高い人物であれば、妖異もまたこれを侵すことは出来ないと言うわけである。これと類似の論理を本文中より挙げれ

ば、

・ばくるは狐の術、ばかされぬは哲人の徳なり。(巻二の一「狐の沙汰付百丈禪師の事」)

・たゞ此方の一心さへたゞしければ、わざはひにあふべからず。……(中略)……みな内にまもりあれば妖怪のものも外をなす事あたはざるなるべし。(巻二の二「狸の事」)

・ただ人道をおさむれば、其怪しき事もおのづから消えうするこそ侍れ。(巻三の三「天狗の沙汰付浅間獄求聞持の事」)

・されども都方の人または名字ある侍に此疵(筆者注：かまいたちによる傷のこと)あたふる者なきは、邪氣の正氣にかたざる理なるべし。(巻一の一「越後新潟かまいたちある事」)

・此妖怪かならず人倫遠き所にあるは、是れ純陰の処より生ずるなれば、人家等多くつゞきてたゞしき氣のあつまる処には、其術もうすらぐ心にや侍らん。(巻三第三「天狗の沙汰付浅間獄求聞持の事」)

と、列挙に暇がない。これらを要約すれば、邪氣は正氣に勝つことが出来ず、正氣の集まるところには怪異も出現することはできない、ということになる。さらに後ろ二つの引用例には、都を正とし、鄙を邪とする価値観が見られるが、それに従えば、

すべて、あやしき事は遠国にある物なりと思ひ給ふべし。

(巻一の二「絶岸和尚肥後にて轆轤首を見給ひし事」)

といった評判もまた、「邪氣の正氣にかたざる」と発想を同じくしていると見ていいだろうか。そしてしばしば、これらの箇所のために、元隣の「評判」は科学的でないという評価も受けてきた。太刀川清氏は本作中における元隣の

評判に一応の合理性を認めつつも、

しかし、この合理的と思われる説明も、きわめて曖昧なものであったことは、「すべて、あやしき事は遠国にある」（巻一「絶岸和尚肥後にて轆轤首見給ふ事」）、と言ひ、鎌鼬を「都方の人または名字ある侍に此疵あたふる事なき」（巻一「越後新潟にかまいたちある事」）と言ひ、犬神を「此犬神王城の人につく事あらず」（巻一「犬神四国にある事」）と言ひ、はては「本心のたゞしき人は千歳の狐もたぶらかす事なし」（巻二「狐の沙汰」）、狸も「たゞ此方の一心さへたゞしければ、わざはひにあふべからず」（巻二「狸の事」）とあるあたりは、評判を離れて教訓を思わせるところで、教訓なくして啓蒙もあり得ない仮名草子の怪異小説の在り方を示している。

と、同時にその評判の「曖昧」さを指摘されている⁷⁾。怪異が人の心の隙に生ずると言うこれら元隣の論を、太刀川氏は科学的な根拠を離れた「教訓」として位置付けておられるわけである。

確かに、怪異との遭遇を「徳」や「正気」の欠如といった個人の資質に結びつけるこれらの論旨は、いかにも仮名草子の教訓性を思わせる。あるいは仏教的な修身の発想からも、右の評判を考へつくことは可能であろう。しかし、この論旨もまた、儒学にその根拠を見出すことができる。これまで取り上げてきた『性理大全』からは離れるが、同じく宋代性理学の入門書であり概説書であった『北溪字義（性理字義）』（巻下「鬼神」門）に、次のような記述が見られる。

- ・大抵妖由人興。凡諸般鬼神之旺都是由人心興之人以為靈則靈。不以為靈則不靈。人以為怪則怪。不以為怪則不怪。
- ・人無覺焉妖不自作。

つまり鬼神が旺盛になるのは、人の心に原因があり、また人に隙がなければ、怪異も現れないのだという。人心と怪異との関わりを述べるこれらの論が、元隣の評判にも影響を与えたのではなかったか。特に傍線を付した一語に着目すれば、そもそも『春秋左氏伝』「莊公十四年」を典故とするこの「妖由人興」の一語が、近世における怪異弁断の大きな拠り所となった言説であることが、既に指摘されている。この点に関しては後章で述べたい。『北溪字義』には寛永九（一六三二）年にすでに『北溪先生性理字義』のタイトルで刊本があり、また万治二（一六五九）年に出版された林羅山による『性理字義諺解』という註釈書もあり、広く受容されていたことが窺われる。羅山の『諺解』の内容は、「一章の結論は『妖ハ人ニヨリテ起コル。邪ハ正ニカタザル』と言い、妖怪と邪神の客観的存在を認めた上とは言うものの、合理的な結論と言えるであろう。」⁽⁸⁾というものであり、これが元隣の評判と大まかな方向で一致していることは言うまでもない。また同じく羅山の著である『野槌』下之四にも、

性理字義云「大抵妖は人に由て興る。凡そ諸鬼神旺皆人心に由る。之興るに人もつて靈と為す。

と、この『性理字義』からの一節が引用されている。元隣が著した『他我身の上』（明暦三年刊）巻三の六には、「つれく草の抄に道春の書かれしなり」との一文が見られるが、この「つれく草の抄」とはいうまでもなく羅山の『徒然草』註釈書『野槌』のことである。同じく徒然草の註釈書である『増補鉄槌』を著した元隣が、当然この書を目にしなかったはずはない。元隣が右の「妖由人興」という一節を認識していたことは明らかであり、この言葉が右に列挙した多くの「評判」の後ろ盾となったであろうことが想像出来るのである。なお『百物語評判』には他にも『北溪字義』の記述内容との一致が見られる。巻五の四「龍宮城并山の神付張横渠の事」で、元隣は『朱子語類』に

載る一話だとして、張横渠が「海神」を祭る際に、海神の姿を人のように作り為しさらに衣冠を着せた事を、誤った行為であると「朱文公」が誹ったというエピソードを語る。ところが同話は元隣の言う『朱子語類』には見出すことが出来ない。一方でこれとよく似た話が『北溪字義』巻下「鬼神」門に見られる。その概要は「伊川破横渠定龍女衣冠從婦人品秩事」というものであり、「海神」でなく「龍女」、「朱文公」ではなく「伊川」であるという点に元隣の話との違いがあるものの、おそらく同一の話を指すのであろう。同様に、巻一第五「空谷響并彭侯と云ふ獸付狄仁傑の事」に語られる狄仁傑と花の精をめぐる一説話もまた、『北溪字義』「鬼神」の部に見出すことが出来る。ただしこれも右と同じく細部に違いが多く、またこれら二話は他書においてもしばしば散見出来る話ではあるために⁽⁹⁾直接の典拠であるとは断言しかねるが、参考までに書きとどめておきたい。

さらにこの「妖由人興」と類似の発想として、近藤瑞木氏は、元隣の用いる「妖は徳に勝たざる」という句が、そもそも『史記』を出典とする成句であり、本邦においても諺として定着していること、また近世日本の怪異小説にしばしばこの思想を象徴化した「儒者の妖怪退治」譚が多く見られることを考察されている⁽¹⁰⁾。以上のことから、元隣の評判に繰り返される論旨は、大部分が朱子学の鬼神論に依っているのであり、一見教訓めいて見える箇所もまた同様に、儒学的な教養を基にしていたということが言えるのである。

三、先行作品における怪異弁断との一致

右の考察から、元隣の評判はその骨子において、朱子学を下敷きとしていくことが明らかとなった。ところが序で述べたように、このような朱子学を用いた怪異分析は元隣だけの専売特許だったわけではない。先行する仮名草子作品の中においても、元隣と同様に朱子学の知識を用いた怪異の「謎解き」を見ることは可能である。それらの中に、

元隣の論理と非常に似たものが散見できるので挙げていきたい。

まず林羅山編の^(四)怪異小説集『幽霊之事』『牡丹燈記』には、幽霊の正体について述べる以下のような箇所がある。

火の消時に、其ふすほる煙ハ、猶も、残り、あた、かなる気ハ、しはらく有かことく、兒既に滅すといへ共、そのたましい、しはらく残る事ハ、此理あらずや／されハ、魂盛成者ハ、かくれて、ミへさる事も有、時によりて、かりに、兒をあらハす事も有／是も皆、又、終に、なくなりて、始に、かへるへし

幽霊の正体を形が消滅した後に「残つた気」であるとするとこの論旨は、先に取り上げた『性理大全』の「或遭刑、或忽然而死、死者氣猶聚而未散」に類似の発想かと思われるが、右の引用箇所において特徴的なのは、『幽霊之事』の書き手が、人の命を「火」に、魂魄を「煙」「熱」に例えることで、幽霊の現れる仕組みを解いている点であろう。同様の比喩を、『百物語評判』巻五「うぶめの事付幽霊の事」に見ることが出来る。先にも一度引いたが再度その本文を挙げたい。

たとへば人の気おとろえ形つかれて病死する人は、火のおのづからきえて、其灰にもあた、かなる気のなきがごとし。或はうらみ死にしぬるか、又は劍戟のうへにて死する者は、其気も形もおとろえざるに俄にしするなれば、いまだもゆる火に水をかけてきやせる時は、其あた、かなる気しばしのこるが如し。されば其人のがうきやうなる次第によりて、其気のこる事も浅深厚薄あるべし。

元隣の評判は、『性理大全』に見られる儒者の説を用い、『幽霊之事』と同じく、幽霊を「たまたまある」ことであると結論付けている。そしてそれを説明するにあたっては、『幽霊之事』の説同様に人体を「火」に、その魂魄を、火

が消えた後にもしばらくのこる「あたたかなる氣」に例える比喻を用いている。この箇所と先に上げた『幽霊之事』との表現の一致は、元隣が同書を典拠として評判を語ったかと思われる程であるが、実際のところ『幽霊之事』は写本が存在するのみで刊行はされておらず、元隣がこれに直接拠ったとは考え難い。むしろ両者の一致は、これらの「評判」が、共通の知識源に拠つてなされたということを示しているかと考えられる。ある怪異を斬るのに、定型ともいえるべき理論が存在したこと、そうして元隣もまたその定型を踏襲していることが見て取れるわけである。

さらに、幽霊の正体を残った「氣」であるとする『性理大全』の論は、弁惑物の先鞭と位置付けられる性理学啓蒙の書『飛鳥川』【慶安五（一六五二）年刊】にも繰り返される。

世の中に。ふしぎなる事といふも。皆一旦のわざにして。久しくあるハなし。あるハハ。はぢを。きよめずして死たるハ。鬱忿のために。をさへられて。魂氣消散せず。又ハ壮年白刃を踏て。死すると。富貴権勢の人と。平生強魂の人とのたぐひ。鎮魂滞魄となりて。形をそなへて。眼前に現じ。又ハ、燐火となり。又ハ、異状の妖怪を。なす事もあれど。久しけれハ。魂氣次第に。消散して。ついで。ふしぎを。なす事なし。 (下五)

こうして比較してみると、『幽霊之事』『飛鳥川』『百物語評判』のいずれもが朱子の説を踏襲した論理を語っていることがわかる。『百物語評判』巻四第八「西寺町墓の燃えし事」に繰り返される「さて其の（怪火のこと）静りしは、彼の血も久しくなれば、血の氣つきて土となる故、おのれとやむ理なり。」という評判も、同様の理論を踏まえてのことであろう。

さらに、朱子学の援用は怪異だけ留まらず、自然現象にも向けられる。巻四の七「雪女の事并雪の説」において、元隣は陰陽五行の論を用いて雪の性質を説明する。

雪は六出と云ひてかならず六かと侍る。霜は三出といひて三つかどあり。是れ雪は純陰の物なれば老陰の数六なる故かならず六出あり。霜は其雪になかばせる物なれば、三出なること勿論の道理なり。

この陰陽を用いた雪の解説は、『飛鳥川』中八にも「雪花所以必六出者蓋只是霰下被猛風拍開故成六出。……（中略）り。」と見る事ができる。おそらく大元は朱子学の「雪花所以必六出者蓋只是霰下被猛風拍開故成六出。……（中略）……又六者陰數大陰、玄精石又六稜。蓋天地自然之數」（『性理大全』卷二十七「風雨雪雹霜露」といった論理に拠るものであると考えられる。三浦邦夫氏は、その一例にとどまらず、『飛鳥川』が広く「性理」つまりは朱子学を用いて、怪異や自然現象を解き明かしていると論じられている²⁰。二書を比較するに、ほぼ同様の内容を言いつつも、そこで用いる言葉や表現は少しずつ異なっており、どちらかがどちらかを（この場合は成立の順序から考えても当然元隣が三柳を、ということになるのであるが）引きうつしたとも思われない。当然、個別に直接の典拠である朱子学の書をあたっていると考えられるわけである。

また、同じく『飛鳥川』では、第一章で引用した元隣の「雷の説」と同様に、陰陽論を用いた雷の解説が展開される。三柳はこの作中において、元隣と同じく『性理大全』を引用していたであろうことが、三浦氏によって指摘されている²¹。つまり両者が共に、同じ怪異を（どちらも雷を怪異という位置づけで紹介しているのであるが）、同じ学説に従って解説していることになる。さらに後に三柳が著した随筆集『醍醐随筆』【寛文十（二六七〇）年自序】においても、同様の論旨による「雷」の分析がなされている。また、寛文十（二六七〇）年に刊行された『秋寢覚』にも同じ朱子学の説を用いた「雷」の分析が見られる。『秋寢覚』は問答形式で事物の起源を語るといった体の仮名草子であ

り、やはりこれも『飛鳥川』と同じく啓蒙を目的とする書であったろう。さらには元隣自身の隨筆集である『小さかつき』【寛文十二（一六七二）年刊】においても、『性理大全』に基づいたかと思われる「雷」の分析が載せられている。また浅井了意著『孝行物語』【万治三（一六六〇）年刊】巻四「喩氏」にも、同様の論旨が語られている。つまりは慶安から寛文年間を中心として、朱子学に基づいた雷の分析がくりかえし取り上げられているということであり、元隣の評判も、既に出来上がった型に乗る形でなされているということになる。さきほどの『幽霊之事』との表現の一致から考え合わせても、特定の怪異を解くにあたり、特定の学説を利用するということが、朱子学を修めたの知識層において定型となっていたことが想像できるのである。おそらく朱子学を学ぶ「場」や、あるいは先行仮名草子において語られたであろうそれら定型を、元隣もまた利用したのではなかったか。つまりは怪異に評判を加えるにあたって、朱子学の学説の中から、元隣独自の着眼によって適宜弁断にふさわしい箇所を紹介したというよりは、むしろ儒者の間で語られる怪異分析を、話題の選択から解釈に至るまでそのまま援用したという様子が窺えるのである。その点で言えば、元隣の評判の独自性というものはそれほど高くないと言わざるを得ないであろう。しかしそれは同時に、元隣の評判が当時における主流の学説にのっとったものであったことの証左とも言えるのである。

おわりに

第一章から三章に渡り、元隣の評判が朱子学の学説に依拠していること、さらにはその怪異弁断の論理が、先行する儒者の作品のものと一致することを指摘してきた。最後に、儒学を用いた怪異弁断の流れにおける本作の位置を確認しておきたい。

前章で述べた通り、儒学を用いた怪異認識は、他書にもしばしば見出すことが出来る。例えば第二章で取り上げた

『性理字義（北溪字義）』の「妖は人に由て興る」の一文は、近世の儒者による怪異分析においてしばしば利用される言葉であったとされる。木場貴俊氏は近世儒者の怪異認識について、「唯物論的理解」つまりは博物学による怪異の把握と、「唯心論的理解」朱子学による怪異の把握、という二点から、その特徴を明らかにされているが、その「唯心論的理解」の際の拠り所となったものがこの『性理字義』の「妖由人興」の一語であったと指摘される¹⁴⁾。また門脇大氏は、「妖由人興」という言葉に基づいた弁惑物の思想潮流を言及されるとともに、その原型が中山三柳の教化随筆集『飛鳥川』【慶安五年（一六五二）年刊】においてすでに形成されていることを示された¹⁵⁾。こうした朱子学をベースとした怪異分析の基礎は、木場氏の論考に従えばさらに羅山にまで遡ることができるといえる。木場氏は近世の怪異小説において、羅山という存在が怪異を語る上での儒学的な知識源となっていたことを指摘されている。確かに「妖由人興」の一語をとっても、前章で取り上げた『性理字義諺解』『野槌』に加え、その著作である『怪談全書』の中においても「妖ハ人ニヨリテ起ル、邪ハ正ニカタザルコトヲ知ト云リ」（卷之四「頼省幹」と繰り返しその表現を用いている。この語が広く受容されるにあたり、羅山の果たした役割は大きかったことであろう。

堤邦彦氏は、そのような「妖由人興」を基にした儒者の怪異認識が、仮名草子の中においても援用されたこと、さらに「心神の惑乱を幽鬼出現の作因とみる心妖一元説」の系譜が存在したことを論じられている¹⁶⁾。儒者による怪異弁断の論理が、その後怪異小説、さらには弁惑物¹⁷⁾へと大いに取り入れられて行くという、いわば怪異小説と儒者をめぐる潮流が諸研究によって明らかにされているわけである。

『百物語評判』が、怪異を朱子学で以て断ずるという姿勢の点で、それら弁惑物の系譜上にあることはすでに指摘されてきた。太刀川清氏は本作を弁惑物の「始祖」と評価されている¹⁸⁾。また堤氏は、『百物語評判』巻一第六「見こし入道并和泉屋介太郎の事」の「是れ愚なる人に臆病風のふき添ひて、すこすこ歩ける夜道に、気の前より生ずる

処の影ぼうしなり」の評判が、「明らかにこれまでみてきた儒者一流の弁断方法に通底するものとみてよからう」と、『百物語評判』の評判が、他の弁惑物と同様の怪異認識に拠っていることを言われている⁹⁹。それら先行研究の明らかなにする通り、元隣の評判もまた「妖由人興」の一文を大きな背景としていることは本論で確認してきた。さらに、元隣の評判が他の怪異弁断作品に一致するのは、その一説に限らない。本論で比較した通り、さらに多くの論理において元隣と儒者の説とは軌を一にするのである。

『百物語評判』の価値は、そのような正統派の学説を娯楽本の形で提供したところにあると思われる。羅山の著した『怪談全書』が、怪異そのものの紹介に重きが置かれていることは言うまでもないであろうし、また三柳の随筆二書における怪異弁断は、あくまでも「随筆集」の多様な話題の一つに過ぎないわけである。それに比べて、怪異の「評判」に主眼を置き、弁断という一点に方向が絞られた『百物語評判』の存在は特異なものであると言うことが出来るだろう。さらに怪談会を収録するという趣向によって、それが虚構であれ事実であれ、この作品が強い娯楽性を獲得していることもまた明らかである。堤邦彦氏は弁惑物の登場を「民間の儒者、心学者の発信・主導するそうした啓蒙主義の伝統をひとひねりして、娯楽読み物の趣向に転じたところに弁惑物の生成を考えるのが、思想史・文学史の流路にそった理解といえるだろう。」¹⁰⁰とされるが、儒者の啓蒙から娯楽読み物としての弁惑物へのまさに転換点にあたるのが『百物語評判』であり、両者の橋渡しのな役割を果たした書であるとも言えるのではないだろうか。

註(1) 雲英末雄「山岡元隣の現実意識について」『文芸と批評』(一九六五・四)

(2) 太刀川清「百物語評判」『近世怪異小説研究』第二章「仮名草子の百物語」(笠間書院 一九七九・一)

(3) 前芝憲一「『百物語評判』の論理」『仮名草子―混沌の視覚』(和泉書院 一九九五・二)

(4) 卷五の四「龍宮城并山の神付張横渠の事」で語られる『朱子語類』に見られるとする、張横渠が海神を祭ったことを朱子

が批難したという故事も、元隣が出典とする『朱子語類』には見出せない。ただし、「程伊川」が、横渠を批難したという記事ならば、『河南程氏外書』巻十（『二程全書』所収）に見える。

(5) 三浦国雄『朱子集』中国文明選三（朝日新聞社、一九七六・一二）

(6) 三浦邦夫『他我身の上』と『莊子口義』（『文芸研究』第二二七集 一九九一・五）に、元隣の仮名草子『他我身の上』に、『莊子』の註釈書である『莊子虞齋口義』が引用されているとの指摘がある。

(7) (2)に同じ。

(8) 『林羅山と『怪談全書』』W・J・ボート（日本古典文学全集 月報五四『日本古典文学全集64 仮名草子集』所収（小学館一九八八・八）

(9) 張横渠と龍神をめぐるエピソードは、『河南程氏外書』巻十にも見られ、そちらが原拠であるかと考えられる。また花の精の話に関しては、管見に入ったものでも『太平広記』巻三六一の「素娥」、「新語園」巻二「花木之妖精」、「怪談録」上「素娥」がある。いずれも武三思の妾が実は花の精であったことが判明するという話であるが、元隣はこれを「牡丹の精」としているなど、細部に違いが見られる。

(10) 近藤瑞木「儒者の妖怪退治―近世怪異譚と儒家思想―」『日本文学』第五十五巻第四号（日本文学協会 二〇〇六・四）

(11) 『幽霊之事』の編著者は、富士昭雄氏によって、林羅山であることが解明されている。「林羅山編著『幽霊之事』」『近世文学論叢』永野稔編（明治書院 一九九二・三）

(12) 三浦邦夫氏により、この箇所が「性理大全」と一致することが指摘されている。（仮名草子『飛鳥川』の性格）『仮名草子についての研究』（おうふう 一九九六・一〇）

(13) (12)に同じ。

(14) 木場貴俊「近世の怪異と知識人―近世前期の儒者を中心にして―」木場貴俊（『ナイトメア叢書三 妖怪は繁殖する』（青弓社 二〇〇六・十二）

(15) 門脇大「弁惑物の思想基盤の一端―『太平弁惑金集談』の一篇を中心として』『国文学研究ノート』（二〇〇九・三）

(16) 堤邦彦「怪異との共棲―『宿直草』に萌すもの―」『江戸の怪異譚』第三章（ぺりかん社 二〇〇四・一一）

(17) この「弁惑物」という用語であるが、太刀川清は「怪談の弁惑物―亡者片袖説話の場合―」『学海』16（上田女子短期大

学紀要 二〇〇〇・三)において、この語を怪説異聞を「妄誕であると世人の惑いを説こうとする一連の怪談」を指す言葉として使用されている。本稿でもこの解釈で弁惑物の語を用いた。

(17)に同じ。

(18)に同じ。

(19) 梶邦彦『近世民間異聞怪談集成』解題 江戸怪異綺想文芸大系5 高田衛監修(国書刊行会 二〇〇三・三)

【使用テキスト】

『百物語評判』太刀川清校訂『叢書江戸文庫 続百物語怪談集成』(国書刊行会 一九九三)

『性理大全』『景印文淵閣四庫全書』七七一冊(臺灣商務印書館)

『小さかづき』古典文庫第二一一冊『小さかづき』(朝倉治彦校 一九六五・二)

『宝蔵』山岡元隣著『寶蔵』(明治書院・一九三三)

『北溪字義』『景印文淵閣四庫全書』七〇九冊(臺灣商務印書館)

『幽霊之事』朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集成第十二卷』(東京堂出版・一九九一・九)

『飛鳥川』朝倉治彦編『仮名草子集成第一卷』(東京堂出版・一九八〇・五)

(てら けいこ・関西学院大学院文学研究科研究員)